

# Creative Experience

## Questionnaire日本語版(CEQ-J)の因子構造の再検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 浩之, 川上, 正浩, 小城, 英子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4549">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4549</a>

# Creative Experience Questionnaire 日本語版 (CEQ-J) の因子構造の再検討

坂田 浩之 ・ 川上 正浩 ・ 小城 英子

臨床心理学専攻准教授

臨床心理学専攻教授

聖心女子大学

## 要約

本研究は、Creative Experience Questionnaire 日本語版 (岡田ら, 2004) を、日本人における空想傾向の特徴をさらに解明するための実用的な尺度とするために、Creative Experience Questionnaire 日本語版 (CEQ-J) の因子構造を再検討し、下位尺度を構成することを目的とした。CEQ-J が含まれる質問紙調査が行われ、大学生 244 名が参加した。探索的因子分析および確認的因子分析を行った結果、「異常な体験」、「子どもの頃の体験」、「空想の鮮やかさ」の 3 因子構造が妥当であることが示された。また、因子分析の結果に基づき、「異常な体験」(5 項目)、「子どもの頃の体験」(3 項目)、「空想の鮮やかさ」(3 項目) の各因子を測定する下位尺度が構成され、概ね十分な内的整合性を有することが示された。本研究の結果、空想傾向の特徴をより細やかに、かつより簡便に測定できる尺度が構成された。

キーワード：Creative Experience Questionnaire, 空想傾向, 不思議現象に対する態度

## I 問題と目的

空想傾向 (Fantasy Proneness) とは、Wilson & Barber (1983) が催眠感受性の高い人々を “Fantasy-Prone personality” として取り上げたことで注目され、研究されてきた人格傾向である。空想傾向は、一日の大半の時間を白昼夢の中で過ごし、鮮明な空想に没頭し、空想したことを身体的に体験し、体外離脱などの異常な体験をしがちな、ふり遊びに従事する、安定的な特性様の症候群と説明される (Merckelbach et al., 2021; Wilson & Barber, 1983)。

Merckelbach et al. (2021) のレビューによれば、Wilson & Barber (1983) では人口の 2% から 4% だと推定されていた空想傾向は、その後の研究では、より多くの者に該当することが示され、空想や白昼夢は一般には健康的、適応的で、心理的機能を高めるものであると捉えられるようになってきた。しかし一方では、Wilson & Barber (1983) 以来、空想への没入が過度であることが、苦痛を

生じさせ、日常生活を損なう場合には不適応になりうることも指摘されている。そして、空想傾向が適応的なものになるか不適応的な苦痛をもたらすものになるかは、それを自分でコントロールできるか、あるいはコントロールできると感じているか否かが鍵となることが指摘されている (Merckelbach et al., 2021)。

また、空想傾向は、子どもの頃の逆境体験から逃れるために生み出され、習慣化された自動的な防衛反応の一つとして、解離症状をはじめとするトラウマ関連の精神病理と重ねられて考えられてきた (Merckelbach et al., 2021)。Irwin (1993) も、子どもの頃の外傷体験が、コントロール感への希求を生み、それが空想傾向につながり、それが社会的文脈を背景として、不思議現象信奉 (Paranormal Beliefs) や超心理学的体験に結びつくというモデルを描いている。しかし、こうしたメカニズムとは独立に、創造性や適応的で楽しい空想活動を刺激する養育環境の中でも空想傾向

が生じることも示されてきた (Merckelbach et al., 2021)。

以上のように、これまでの研究知見からは、空想傾向は対照的な側面を有していることが示されている。したがって、空想傾向を病的なもの、あるいは、創造的なものと一面的に捉えず、それぞれの人にとっての空想傾向の特徴や由来を適切に理解することは、空想傾向の強い子どもや大人を適切に支援する上で必要であると考えられる。また、これまでの研究知見が、Creative Experience Questionnaire (Merckelbach et al., 2001) などの空想傾向を測定する自己報告式の尺度に拠っているという Merckelbach et al. (2021) の指摘を踏まえるならば、空想傾向を適切に測定する尺度を備えておくことは、空想傾向の特徴をさらに解明していく上で重要なことであると言える。

日本において空想傾向を測定する自己報告式の尺度として代表的なものとして、Creative Experience Questionnaire 日本語版 (CEQ-J) がある。Creative Experience Questionnaire (CEQ) とは、Merckelbach et al. (2001) が開発した 25 項目からなる空想傾向を測定する尺度である。CEQ-J は、この CEQ の 25 項目を岡田ら (2004) が日本語に訳したものである。Merckelbach et al. (2001) は 16 歳から 60 歳までの高校生、大学生、大学職員 332 名 (平均年齢 22.7 歳) のデータを用いて CEQ の因子分析を行っている。その結果、固有値 1 以上の因子として 9 因子を抽出しているが、固有値のスクリープロットを精査した結果、1 因子解を採用している。そして、25 項目の合計得点を CEQ の得点としている。また、Merckelbach et al. (2001, 2021) において、CEQ 得点に年齢や男女による違いは認められないことが示されている。一方、CEQ-J に関して岡田ら (2004) は、18 歳から 27 歳までの大学生 433 名 (平均年齢 19.2 歳) のデータを用いて、Varimax 回転を施した主成分分析を行い、固有値のスクリープロットと解釈可能性から 3 主成分を抽出し、「異常な体験」、「空想の鮮明性」、「子どもの頃の体験」と命名している。そして、CEQ と同様に 25 項目全体の得

点を算出するとともに、3 つの主成分得点を算出し、下位得点としている。CEQ-J に関しても、25 項目全体の得点における男女差は認められていない (岡田ら, 2004)。

さらに岡田ら (2004) は、CEQ-J の全体得点および 3 つの下位得点と、Imaginative Involvements Inventory (III; 笠井・井上, 1993) および解離性体験尺度 (DES; 田辺・小川, 1992) との関連を検討している。その結果、CEQ-J の全体得点および「異常な体験」、「子どもの頃の体験」と III および DES との間には有意な正の相関が認められた。一方、「空想の鮮やかさ」に関しては III とは有意な正の相関が認められたが、DES との間には有意な相関が認められないことが示された。このように、CEQ-J の下位得点を用いることで、空想傾向の特徴をより細やかに理解できる可能性がある。

しかしながら、岡田ら (2004) においては、3 つの下位得点の主成分得点によって算出されているため、下位得点を算出するためには調査ごとに主成分分析を行う必要があり、また、調査データによって主成分分析の結果が異なる可能性もあるため、安定して下位得点を算出し、妥当に他研究と調査結果を比較することが困難である。そこで本研究では、CEQ-J を、日本人における空想傾向の特徴をさらに解明するための実用的な尺度とするために、探索的因子分析と確証的因子分析によって CEQ-J の因子構造を再検討し、この因子に対して、個人差を簡便かつ適切に測定し得る下位尺度を構成することを目的とする。

## II 方法

### 1. 調査参加者

関東圏の A 女子大学および近畿圏の B 女子大学に所属する 18 歳から 28 歳までの大学生 244 名 (女性のみ。平均年齢 18.9 歳,  $SD=1.1$ ) が調査に参加した。

### 2. 調査時期

調査は 2017 年 4 月から 2018 年 4 月の間に実施された。

### 3. 質問紙の構成

#### 1) Creative Experience Questionnaire 日本語版 (岡田ら, 2004) 25 項目

Creative Experience Questionnaire 日本語版 (CEQ-J) は, Merckelbach et al. (2001) が作成した Creative Experience Questionnaire (CEQ) 25 項目を岡田ら (2004) が日本語に訳して構成した尺度である。「何かを歌ったり書いたりする時, 自分以外の誰かや何かに自分が操られているという感覚をもつことがときどきある」, 「退屈なときは空想をし始めるので, 決して退屈することはない」, 「子どもの頃, 小人や妖精や, ほかのおとぎ話に出てくるような登場人物が実在していると強く信じていた」などの 25 項目から構成される。回答に関しては, Merckelbach et al. (2001) の最終版では “Yes”, “No” の 2 段階評定, 岡田ら (2004) では「当てはまらない」を 1, 「あまり当てはまらない」を 2, 「やや当てはまる」を 3, 「当てはまる」を 4 とした 4 段階評定が採用されているが, 本研究では, 因子構造をより精査するために「まったくあてはまらない」を 1, 「どちらかといえばあてはまらない」を 2, 「どちらともいえない」を 3, 「どちらかといえばあてはまる」を 4, 「よくあてはまる」を 5 とする 5 段階評定で回答を求めた。項目間の順序は一通りのランダムな配置で並べられた。なお, APLe 改訂版 (小城ら, 2017) などの他の複数の尺度と組み合わせで質問紙が構成された。質問紙に含まれるその他の尺度については, 本研究では言及しない。

#### 4. 手続き

心理学系の講義における授業時間内に, 集団で質問紙への回答が求められた。所要時間はいずれも 10 分程度であった。

#### 5. 倫理的配慮

回答に際しては, 研究の目的が集団の傾向を把握するものであること, 調査の結果は統計的に処理され, 個人の結果が問題とされたり, 評価されたりすることはないこと, 結果が研究の目的以外に使用されることはないこと, 調査への参加は自由意思によるものであること, 調査に参加しない

ことで不利益が生じることは一切ないことをフェイスシートに記載していた。フェイスシートに記載されたこれらの記載事項に同意する場合にのみ, 調査に参加してもらった。また, フェイスシートに記名欄を設けず, 無記名で回答してもらった。その代わりに各参加者に ID を割り振り, フェイスシートにはその ID を記入してもらった。そして, 複数回に分けて行われた調査データのマッチングは, その ID を用いて行った。なお, 本研究に関して, 大阪樟蔭女子大学ならびに聖心女子大学の研究倫理委員会の承認を得ている (大阪樟蔭女子大学: 承認番号 29-16, 聖心女子大学: 承認番号 29\_1・29\_5・29\_6・29\_8)。

#### 6. 分析方法

本研究の分析には HAD (清水, 2016) および Amos (Ver.23) が使用された。

### III 結果

#### 1. CEQ-J の探索的因子分析

CEQ-J25 項目に関して探索的因子分析 (最尤法, Promax 回転) を行った。MAP 基準や解釈可能性から, 岡田ら (2004) と同様に 3 因子解を採用した。また, 因子負荷量が 1.501 以上であることを基準に因子分析を繰り返し, 11 項目を採択した (表 1)。

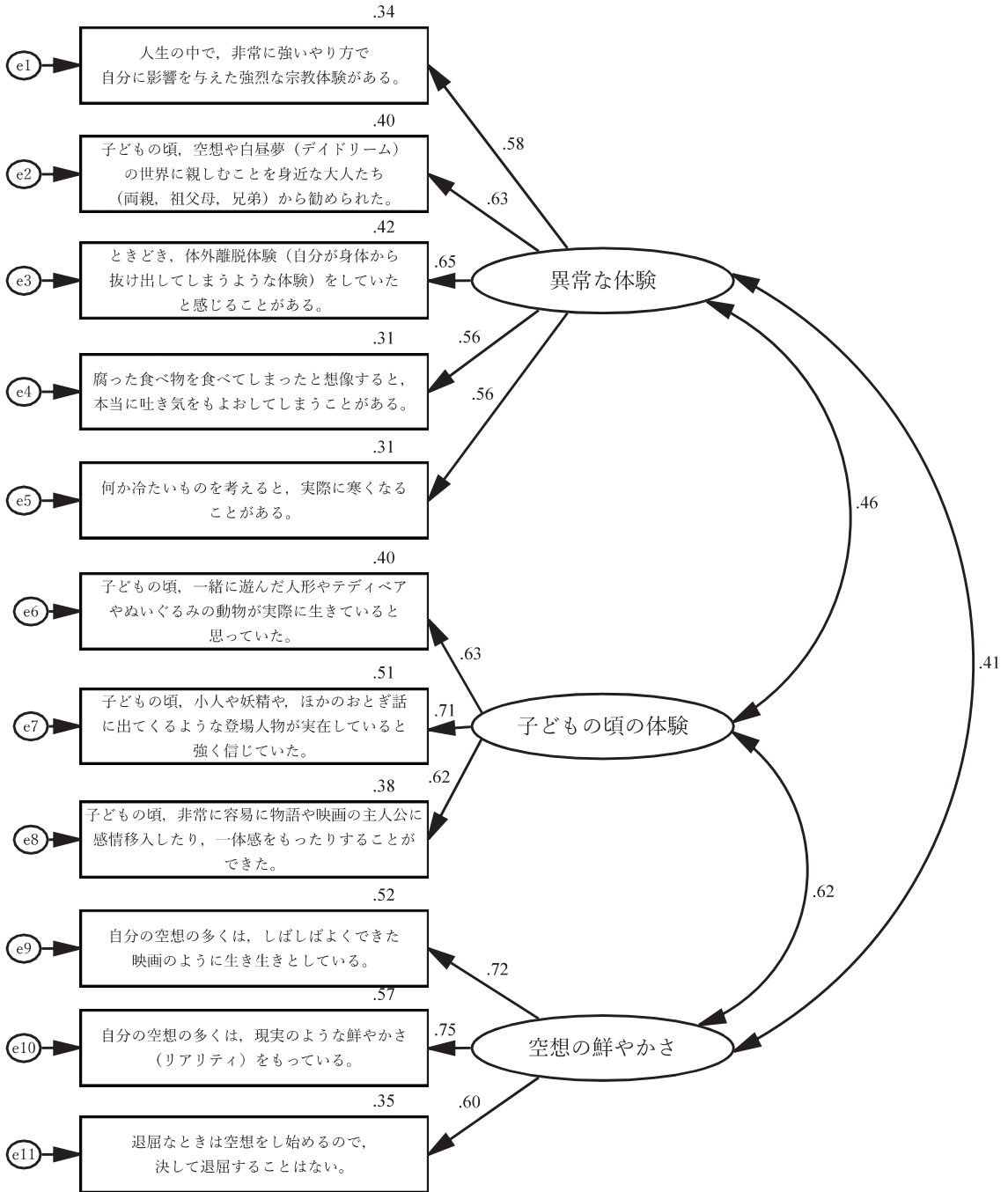
第 1 因子は, 岡田ら (2004) が抽出した「異常な体験」と同様に, 「人生の中で, 非常に強いやり方で自分に影響を与えた強烈な宗教体験がある」, 「ときどき, 体外離脱体験 (自分が身体から抜け出してしまうような体験) をしていたと感ずることがある」などの項目に高く負荷し, 体外離脱体験や強い宗教体験など異常な体験に関する因子であると解釈されたため, 「異常な体験」と命名された。第 2 因子は, 岡田ら (2004) が抽出した「子どもの頃の体験」と同様に, 「子どもの頃, 一緒に遊んだ人形やティベアやぬいぐるみの動物が実際に生きていた」と思っていた」, 「子どもの頃, 小人や妖精や, ほかのおとぎ話に出てくるような登場人物が実在していると強く信じていた」などの項目に高く負荷し, 子どもの頃の体験に関する

因子であると解釈されたため、「子どもの頃の体験」と命名された。第3因子は、岡田ら（2004）が抽出した「空想の鮮やかさ」と同様に、「自分の空想の多くは、しばしばよくできた映画のように生き生きとしている」、「退屈なときは空想をし

始めるので、決して退屈することはない」などの項目に高く負荷し、空想の鮮やかさに関する因子であると解釈されたため、「空想の鮮やかさ」と命名された。次に、因子間相関を算出したところ、 $r=.35$  から  $.52$  と効果量中から大の正の相関が認

表1 CEQ-Jの因子分析結果（最尤法・Promax回転）

	1	II	III	$h^2$
<b>第1因子 異常な体験 (<math>\alpha=.727</math>)</b>				
人生の中で、非常に強いやり方で自分に影響を与えた強烈な宗教体験がある。	.68	-.17	.07	.38
子どもの頃、空想や白昼夢（デイドリーム）の世界に親しむことを身近な大人たち（両親、祖父母、兄弟）から勧められた。	.67	-.07	.09	.43
ときどき、体外離脱体験（自分が身体から抜け出してしまうような体験）をしていたと感ずることがある。	.62	-.20	.19	.41
腐った食べ物を食べてしまったと想像すると、本当に吐き気をもよおしてしまうことがある。	.60	.14	-.15	.31
何か冷たいものを考えると、実際に寒くなることがある。	.59	.08	-.25	.31
<b>第2因子 子どもの頃の体験 (<math>\alpha=.690</math>)</b>				
子どもの頃、一緒に遊んだ人形やティベアやぬいぐるみの動物が実際に生きていたと思っていた。	-.08	.71	.20	.49
子どもの頃、小人や妖精や、ほかのおとぎ話に出てくるような登場人物が実在していると強く信じていた。	.07	.69	.06	.50
子どもの頃、非常に容易に物語や映画の主人公に感情移入したり、一体感をもったりすることができた。	-.08	.64	.01	.38
<b>第3因子 空想の鮮やかさ (<math>\alpha=.730</math>)</b>				
自分の空想の多くは、しばしばよくできた映画のように生き生きとしている。	.01	.12	.64	.59
自分の空想の多くは、現実のような鮮やかさ（リアリティ）をもっている。	-.03	.26	.53	.53
退屈なときは空想をし始めるので、決して退屈することはない。	.25	.04	.42	.36
因子間相関				
	I	—	.42	.35
	II		—	.52



$\chi^2_{(41)} = 79.114 \quad p < .001$

GFI=.948 AGFI=.916 RMSEA=.061 CFI=.938

図1 CEQ-Jの確証的因子分析の結果



められた。

## 2. CEQ-J 各下位尺度の構成と内的整合性

各因子に負荷の高い項目により下位尺度を構成した。そして、各下位尺度の内的整合性について確認するために、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。CEQ-J 各下位尺度の  $\alpha$  係数を表 1 に示す。第 1 因子「異常な体験」が  $\alpha = .727$ 、第 3 因子「空想の鮮やかさ」が  $\alpha = .730$  と  $.70$  以上の値が得られ、高い内的整合性が確認された。第 2 因子「子どもの頃の体験」は  $\alpha = .690$  と  $.70$  未満であったが、許容範囲の値であると判断された。

## 3. CEQ-J の確証的因子分析

CEQ-J について探索的因子分析の結果を踏まえた 3 因子のモデルを組み、確証的因子分析を行った。その結果を図 1 に示す。適合度は、 $\chi^2_{(41)} = 79.114$ ,  $p < .001$ , GFI = .948, AGFI = .916, RMSEA = .061, CFI = .938 と高い値が示された。そこで、この 3 因子 11 項目のモデルを採用することにした。

## 4. CEQ-J 各得点の基礎統計量

そこで、各下位尺度を構成する項目の得点を合計し、項目数で除した値を算出し、それを各下位尺度得点とした。各下位尺度得点の平均値および標準偏差を表 2 に示した。また、Merckelbach et al. (2001) や岡田ら (2004) では、CEQ あるいは CEQ-J の全 25 項目の得点を合計得点によって算出しているが、本研究では、下位尺度得点と同様に、平均得点によって CEQ-J 全 25 項目の得点を算出した。その結果を表 2 に示す。

表 2 CEQ-J の各尺度基本統計量

	得点範囲	M	SD
CEQ-J全25項目	1.00 — 5.00	2.54	0.67
異常な体験	1.00 — 5.00	1.97	0.80
子どもの頃の体験	1.00 — 5.00	2.99	1.07
空想の鮮やかさ	1.00 — 5.00	3.02	1.01

## IV 考察

本研究では、CEQ-J (岡田ら, 2004) を、日本人における空想傾向の特徴をさらに解明するた

めの実用的な尺度とするために、CEQ-J の因子構造が再検討され、下位尺度が構成された。探索的因子分析および確証的因子分析を行った結果、「異常な体験」、「子どもの頃の体験」、「空想の鮮やかさ」の 3 因子構造が妥当であることが示された。また、因子分析の結果に基づき、「異常な体験」(5 項目)、「子どもの頃の体験」(3 項目)、「空想の鮮やかさ」(3 項目)の各因子を測定する下位尺度が構成され、概ね十分な内的整合性を有することが示された。本研究の結果、空想傾向の特徴をより細やかに、より簡便に測定できる尺度が構成された。

本研究の限界と今後の課題は以下の通りである。本研究の調査参加者は女子大学の学生であり、データはすべて女子学生のものであった。Merckelbach et al. (2001, 2021) では、CEQ の得点に年齢や男女による違いはないことが示されているものの、本研究における知見が、他の年齢層や性別まで一般化可能であるかどうかはさらなる検討が必要である。

以上のような、限界や課題はありつつも、本研究において CEQ-J の下位尺度を構成できたことは、日本人において空想傾向が、解離などの精神病理や不思議現象に対する態度とどのように関連しているのか、より精緻に検討する上で有用であるといえる。

## 付記

本研究は、科学研究費補助金基盤 C「不思議現象と心理学教育 (課題番号 15K04038 研究代表者 小城英子)」の助成を受けて行われたものである。

## 文献

- Irwin, H. J. (1993). Belief in the paranormal: A review of the empirical literature. *Journal of the American Society for Psychical Research*, 87, 1-39.
- 笠井仁・井上忠典 (1993). 想像活動への関与に関する研究 —— 測定尺度の作成と妥当性の検

- 討. 催眠学研究, **38**, 9-20.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2017). 不思議現象に対する態度改訂版尺度の妥当性検証 (2) —— 不思議現象に対する態度 (52). 日本心理学会第 81 回大会発表論文集, 156.
- Merckelbach, H., Horselenberg, R., & Muris, P. (2001). The Creative Experiences Questionnaire (CEQ): A brief self-report measure of fantasy proneness. *Personality and Individual Differences*, **31**, 987-995.
- Merckelbach, H., Otgaar, H., & Lynn, S. J. (2021). Empirical Research on Fantasy Prone-ness and Its Correlates 2000-2018: A Meta-Analysis. *Psychology of Consciousness: Theory, Research, and Practice*, **8**, 1-25.
- 岡田斉・松岡和生・轟知佳 (2004). 質問紙による空想傾向の測定 —— Creative Experience Questionnaire 日本語版 (CEQ-J) の作成. 人間科学研究, **26**, 153-161.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD —— 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. *メディア・情報・コミュニケーション研究*, **1**, 59-73.
- 田辺肇・小川俊樹 (1992). 質問紙による解離性体験の測定 —— 大学生を対象とした DES (Dissociative Experience Scale) の検討. 筑波大学心理学研究, **14**, 171-178.
- Wilson, S. C., & Barber, T. X. (1982). The fantasy-prone personality: Implications for understanding imagery, hypnosis, and parapsychological phenomena. *PSI Research*, **1**, 94-116.